

## ■過蓋咬合の改善に咬合挙上板を用いた症例



患者は初診時 8 歳 9 か月の女児で、前歯部の叢生を主訴に来院した。側面頭部エックス線規格写真から骨格的な不調和は認められなかったが、オーバーバイト+7 mm、オーバージェット+6 mm で上下顎中切歯ともに舌側傾斜を呈しており、過蓋咬合および上下顎前歯部の叢生が認められた (左)。模型分析では側方歯群の萌出余地不足が予想された。下顎臼歯部の低位による過蓋咬合を伴う叢生と診断し、まず過蓋咬合の改善を目的として咬合挙上板を使用することとした (中)。

装置装着から 1 年後、オーバーバイトの減少と咬合挙上がなされた (右)。装置を撤去した後も後戻りする傾向があるため、咬合挙上板の使用を継続した。

(→Part 5-8)

## ■上顎前歯前突と下顎の後退の改善にアクチバートルを用いた症例



患者は初診時 10 歳 11 か月の男児で、前歯の突出を主訴に来院した。著しい上顎前歯の唇側傾斜と下顎の後退感が認められた (左)。治療方針として、上顎前歯の舌側への傾斜移動と、患者が成長期であるため下顎骨の前方への成長促進を行うためアクチバートルを使用することとした (中)。

来院ごとに上顎前歯の舌側相当部のレジンを徐々に削合しながら、前歯の舌側への傾斜移動を行った。また、下顎は構成咬合をとることで前方に誘導され、前方成長が促進した。装置装着から 1 年後には、上顎前歯の前突と上下顎歯列弓の近遠心的関係が改善した (右)。

(→Part 5-9)